シーン5

「あははっ、クラスのみんなとっても楽しそうにまぐわってるね」
「退魔巫女本部からの応援できたエースちゃんもやっと堕ちてくれたみたいでー、ちんぽに囲まれて嬉しそうで何よりだよ」
「先生も委員長も男子も女子も、みんなみんな妖気に堕ちてはだかでちんぽからせーし出すことだけ考えて、ああ、ボクの異界領域完成の宴にぴったり」
「ね、キミもそう思うでしょ？ ずっとボクのふたなりチンポを見てもじもじして、エースちゃんとヤッてきてもいいんだよ？ あは、結構いい仲になりそうだったけどー、うんうん、ボクからの命令だったから？ ふふふ、嬉しいこと言ってくれるね」

「んふ、かわいい～♡」
「眷属くんには、ご褒美あげちゃう♡ んしょっ、教壇に腰かけるから」
「キミは四つん這いになって、うん、そう。 犬みたいにボクのオチンポしゃぶって♡」
「はぁはぁ、眷属くんのケダモノみたいなフェラぁ、上から見下ろしてると、すっごく興奮して、ふぅ、ふぅっ……ちょっと涎垂らしながら、しゃぶらないで、必死すぎだよ」
「いやらしい口まんこ、見てたらぁ、そのままふたなり勃起ぃ、んんんっ、喉奥まで押しこんで、オナホづかいしたくなるよッ♡」
「んぅ、んぅっ、んぅぅっ……んふ、くふぅ……んふぅんんッ…♡ はぁっ、キミのお口ぃ、気持ちいいッ♡」
「ベロと喉の粘膜が絡んで、んん、んんんっ、本当におまんこみたいだよ♡」
「それに唇もきゅうって窄めて、んん、んんんっ、抜き差しするたびに、カリのエラぁ、擦れて気を緩めたら、このまま中に出しちゃいそうっ…♡」
「オナホとしても優秀な眷属を持てて、ボクはうれしいよ、ん、んん♡」
「そらっ、キミももっと頭を振ってご主人様であるボクを満足させてよ、んうっ♡ あはぁ、もっと動くよ。ん、んん……目を白黒させて、苦しそうだけど、まだ行けるよね。激し目の方が好みなの、もうどんどん変態になって」
「じゃあ、クラスメイトのみんなにお手本を見せてあげようね。喉の奥の奥まで♡ 一気に差し入れてぇ♡ 私のフタナリちんぽ必死に咥えてそんな上目遣いされるとボクもっともっとちんぽ出し入れしちゃくなっちゃう♡」
「ほらほら、ほらぁッ、このまま喉に出すからっ、全部出すよ♡ ご主人様の♡ 濃厚せーし♡ 喉の奥に♡」
「んおおっ♡ んんんんっっっ♡♡♡♡！！！」

「はぁ～っ、出し心地も最高♡ マゾオナホの鏡だね♪」
「んんっ、あれれ、ちょっとむせて、出しすぎたかな？」

「でも、最後まで飲み干してよ。そうっ、喉を鳴らして、美味しそう。」
「けど、まだ足りないみたいだね？」
「だって、もっと欲しそうな顔してるもの。くふふっ♪」

「ドスケベな妖魔の体に、ドMなキミ♡　二つあわさって、ここまでメスマゾ堕ちにするなんて」
「人間だった頃には考えられなかったよね？」
「はぁはぁ♡　……ご主人様としてボクもうれしいよ♡　さ、もっと楽しもう。」
「みんなに見せつけるようにキスしよ♡　いやらしい欲望まる出しのキス♡　んちゅばちゅ、ちゅぶう、ちゅぶれろ、れろれるぅ♡」
「ふぅ、ふぅっ……んんっ、んぢぅるっ、じゅるるっ、ふはぁ♡　精液くさーいキミのベロ美味しい♡……んぷはぁ～っ♡」
「じゃ、黒板に手をついて♡　ぷりっぷりのキミのお尻、ボクに突き出して。はぁはぁ、尻たぶも、メスみたいにふっくら肉付いてむちむち感でオチンポを誘っちゃってるね」
「手で盛り上がったヒップ撫でまわすだけで腰ビクつかせて、イキそうじゃない。まだ、なんにもしてないのに、マゾ感度高すぎだって♡」
「くふふっ♪」

「自覚なくても、相当深いところまで堕ちきってるよね。けど、どこまで行っても、キミはオス妖魔のままで無様なマゾメス姿をさらすだけだけどね、んふっ♡」
「ほらぁ、みんなの前で、ギンギンに硬いふたなりチンポで自分のアナルをずぶずぶ犯して下さいって、言えたら……あ、もうっ、言い終わる前に尻振って、くぱぁおねだりなんて、焦りすぎ♡　まだ躾けが必要みたいだね♡」
「それじゃ、ボクのオチンポで犯してあげるっ」

「そらっ、んんんっ♡」
「硬いのに肉がねっとり、ぎゅって締まって♡　奥まで熱い♡　最高のアナルだね♡　くふふっ♡」
「はふ、あふぅ、お尻の奥をチンポ先で突きながら、んちゅぱ、ちゅば、お耳も舐めてあげる。だって、キミ、耳弱いから、一緒に責めると、アナルも締まって、くひ、んひぃ、ボクが気持ちいいし♡」
「それにキミだって、ちゅばちゅ、ちゅぶ、んちゅぶちゅぱ、イヤじゃないよね。これだけお尻まんこ反応してぇ、感じてるの、伝わってくるよっ、ん、んん♡」
「ね、クラス中のエッチな喘ぎや乱交の音、聞きながら、キミも立ちバックで掘られるの、どう？」
「はぁはぁ、いいよね、この姿勢。お尻差し出して、いかにも犯されてますって、感じでさ」
「んん、またぁ、ケツ穴、きゅんきゅんさせてはぁはぁ、キミのマゾ、本当に重症だよね」
「んん、んちゅばちゅ、ちゅぶ、はぁはぁ、学校を中心にボクの異界領域が街中に広がって、んちゅばちゅ、ちゅぶっ……ボクらが、どこでなにしようと自由だよ♡」

「今度は裸に首輪だけ付けておさんぽプレイしようか♡　公園で、駅前で♡　通行人に公開エッチしながら回るの。」
「とりあえずは、ん、んん、んああっ、今の乱交を存分に味わおうね」
「んちゅぱちゅ、ちゅぶちゅぽ、んちゅぶ、耳の中まで舌ズボで、ツユダクおしゃぶりされて、だいぶトロトロみたいだね♡」
「はぁ〜っ、そのアヘ顔、可愛い♡　ボクだけで独占したいよ、ふぅ、ふぅっ♡」

「ね、そろそろイキそう？」
「それともまだ、頑張れるかなぁ、ん、んん♡　いいよ、キミはそのままで。ボクはすっきりしたいし、はぁはぁ、一回出すね♡」
「オナホに射精タイミング、いつもあわせる必要ないし、キミのお尻にだったら、何度でも出せるし。」
「けど、ボクの妖魔ザーメン、ドバ出ししちゃったら、たぶんキミもイっちゃうよね？」
「当たり前じゃない。眷属くんがご主人様の、熱々の中出しに耐えられるはずないじゃない？」
「しかも今のキミは、もう人間じゃない。ドMで、中出し大好きな破廉恥メス堕ち妖魔なんだよ」
「はぁ、はぁっ、そらっ、このまま種付けされて、イっちゃえっ♡　んん、んんんっ、そらっ、これでどうっ♡」
「んくぅ、んっはぁあぁぁ〜〜ッ♡♡」
「はぁ〜っ、気持ちいいっ♡」
「マゾのケツまんこ、よすぎぃ♡」

「今も直腸の奥までびしゃびしゃ濃いの浴びせられて、アクメったまま、戻ってこれないんじゃないの？」
「返事がないってことは、そ〜いうことだよね。くふっ♪　いいよ、そのままラクにして。キミの体を抱えあげて、んしょっと、ふたなりチンポを……んんっ、尻穴に押しこんだままで、みんなのほうを向くよ」
「ボクだって妖魔なんだから、これぐらい楽勝。どうせなら、キミの両方の太ももを割り開いてぇ、M字開脚にして、クラスメイトの前でズボズボしてあげる♪」
「ほらぁ、繋がってるところ、みんなにガン見されてるよ。乱交してるクラス中で、今、一番キミが恥ずかしい格好だね♡　でもマゾだし、無様な姿見られて感じてるんだよね？」
「ハァハァ息上がってるし、くふぅ、んふぅんっ……お尻の吸いつき、すっごいことになってるぅ…♡」
「ほらぁ、ふたなりチンポが出入りしてるとこ、クラス中に見られてる♡」
「しかも、何人かはキミのことをガン見しながら、勃起したオスマラ、扱いてるみたいだし。んんっ♡」
「んふふっ、またあそこ、ギンギンにして。しかも緩んだお尻の結合部から、んふ、くふっ、腸液、垂れ流して、エッチすぎだよね♡」

「ね、クラスの男子みんなから、オナニーのおかずにされる気分って、どう？」
「それだけキミが色気のあるメスに、堕ちてるってことだから。それにしても異界領域の効果、抜群だね」
「クラスの真面目な子も、お堅い女子も、みんな乱れてる。とっても素敵な餌場♡」
「退魔巫女のエースちゃんはどっしょうかなー、餌として飼ってあげるだけじゃちょっともったいないからー、色々楽しんだら妖魔にしてあげよっか♡」
「そしたら、フタナリちんぽ2本でキミを前と後ろからずぼずぼしてあげれるね♡」

「あは♡　みんなイっちゃってせーしのシャワーだ♡」
「はぁはぁ、ザーメンぶっかけされると、んぅ、んぅうっ、激しく高ぶってぇ、ふたなりデカマラぁ♡　おっ、おおっ♡　もっと凶悪に勃起ぃ♡　しちゃうんっ♡♡」
「ふひ、くひぃ、もう我慢なんて、無理ぃ♡」
「キミのお尻、ガバガバになって、二度と戻らなくなるかもだけど……ごめんっ、んぅ、んぅっ、んおうっ♡」
「堕ちたクラスメイト見ながらぁ、キミのアナルで妖魔の本気ピストンっ、性欲むき出しのドスケベセックスぅ、しちゃうっ♡」
「んお、んおお、んっおおっ、くふ、んふぅ、チンポ先ぃ、奥まで抉って、腹ボコで抜き差ししちゃってるけどマゾ眷属だし、これぐらい耐えられるよねっ♡」
「ほらほら、ほらぁっ♡　直腸全部ぅ、きゅうって絡んで、いい、いいのぉ、最高のオスあなるっ♡」
「ぜぇはぁ、んあ、んあああっ、そらっ、そらそらっ♡　ボクの濃いい精液で、お腹の中っ、いっぱいにしてあげるッ！」
「勢いよくザーメン、奥に浴びせられながら、果てろ、思いきり果てちゃえっ♡　イって完全にメスになれっ♡」
「んううっ、こんなに激しく突いてるのに、キミも腰、左右に振って、淫乱にもほどがあるよね、はぁはぁっ♡」
「それでこそ、ボクの一番の眷属だよっ♡」
「マゾのお手本みたいなキミには、ふぅ、ふぅっ、とびきり濃厚な妖気たっぷりの、ボクの精液ぃい、たっぷりと出してあげるからぁ～ッ♡♡」
「んぅ、んううっ♡　んっあぁあああ――ッ♡♡♡」

「そらそらっ、ナマ出ししながら、いっぱいズボズボしてあげる♡」
「あふぅ、んふぅぅ、出しながら、アナル掘るのぉ、極楽すぎぃ♡」
「あはっ、キミもメスイキきめちゃったんだね。隠しても、丸わかりだよ。下半身ビクつかせながら、イキ声出しちゃってるし♡」
「うん、それっ。押し殺してるけど、全然余裕のない声♡」
「くふ、んふぅ、イったキミのアナルまんこ、」

「ん、んん、んうっ、いっぱいシェイクしてぇッ……前立腺、ゴリゴリえぐってあげるね、んんっ♡」
「んふふっ、先っぽからザーメンのゆるいお漏らし、全然、止まんないね」
「そらっ、ポタポタ、教室の床にいやらしい水滴、落として……はぁ～っ、無様すぎぃ♡」
「ふぅ、ふぅっ、クラス中に見られながらメスイキでところてん射精しつづけるのって、どんな気分？」
「マゾのキミなら、気持ち良すぎて、頭おかしくなるんじゃいの？　くすすっ♡」
「精液の匂いもキミのが一番、キツくて……はふ、あふぅ、深呼吸して、味わいたくなっちゃう♡」
「ね、このままザー汁と一緒に、妖気を沢山ばらまいて、学校をボクらの異界領域に染めちゃおうよ。あんんっ、またチンポミルク、噴きあげて」
「マゾ妖魔だから、責められるたびに、ザーメン製造しちゃうんだね。キミのことだよ、チンポミルクサーバーくんっ♪」
「けどぉ、ああっ♡　キミと一緒にドスケベな妖魔に堕ちることができてぇ、ボクはすっごく満足♪」
「はぁはぁっ、ハッピーすぎて、怖いぐらい。」
「これからもキミをマゾ眷属として、たっぷりと可愛がってあげるから、楽しみにしてて」

「さて、次はキミをどうやって辱めようかなぁ。」
「んふふふふっ♪」